
GS とネギま、歯車がネジれて廻りだす

朱月 ケイワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GSとネギま、歯車がネジレて廻りだす

【Nコード】

N8769Z

【作者名】

朱月 ケイワ

【あらすじ】

前作（短編・横島忠夫はどーなった？）の続きとなります、一応クロス物になります

あの中で語られていた何処で何をしたのかを書いてみました。

GS横島忠夫が人質を救助して事件は解決したかの様に思えた。しかし、幾度も煮え湯を飲まれた魔族は最後のトラップを起動させる。

雷角結界と時空消滅薬で描かれた転移用魔方陣、

それは辺り一帯を世界から弾き出すには十分な物、
まっ先に気づいた横島は文珠を取り出し魔法陣の中心に突っ込んで
いく、

【一】【点】【集】【中】・【解】【術】

目が眩むような光が辺りを満たし気づけば魔方陣の中心のみポツカ
リと掻き消えていた、
そして横島もその場から消え去っていた。

レポート1 ビギニングデイズ（前書き）

この作品は二次創作（cross物）です。

一応原作を読んでいることを前提で書いています（GSは全巻、ネギまは文化祭終あたりまで）

原作作品に、さらに作者が創作を加ええたものです。

人物設定の違いや時系列の違いもあります

その辺りは、なにとぞご容赦と暖かい目をお願いいたします。

上記をご理解の上、興味をお持ちの方は先にお進みください。

（追記、作品に明らかにミスが有る場合や誤字脱字の指摘は上記の限りではありません指摘していただくと助かります）

レポート1 ビギニングデイズ

・

雲一つない空に一粒の小さな点

・

下へ下へと動いていく、鳥より幾分大きく、小型飛行機などより小さい

.

ここで映画なら空から墜ちてくる点に有名なセリフを「マントを纏った超人男だ」とでも言ってそのまま地面に衝突せずに済むのだが、そうはいかない。

.

.

……それも仕方のないことだろう、点は基本的にシリアスに不向きなのだから

・

・

「ど〜〜〜ち〜〜〜〜〜〜〜つく〜〜〜〜〜〜〜しよおお〜
〜〜〜〜〜ワイがなにしたってゆー——んじゃ〜〜〜〜〜なんで
もう一度こないな——コトをせにやああかんのやあ——
——ッ」

空の片隅で、涙を流しながら落下していく青年が一人何かを叫んでいる

・

男落下中

・

・

地面まであと XXXX0——

はるか上空で青年が叫んでいる頃、とある学園都市の片隅にある森の中で、火花と血飛沫、さらに破裂音を出しながら動く影があった。

影はポニーテールを左サイドに括り太刀を構える少女（桜咲 刹那）と上下共に迷彩柄の服を着こみ銃を両手に持ち周囲を警戒する少女（龍宮 真名）の二人であった。

二人は自分達の周囲に大量に湧き出てくる敵に囲まれ焦っていた。

春休みはじめの夜、二人のチームで夜の警備仕事、最初は順調に何事も無く静かな夜だったが、奇妙な侵入者が現れ式神を大量に放

つてきて周囲を囲まれる。

湧き出てくる敵が【人の影】のような形状でこちらの攻撃が効果がないのも焦りを生み不安を加速させる要因になっている。

なにせ、銃を構えた少女が霊的处理をした弾を打ち込むが穴は開くが少しすると塞がり、太刀で腕や足を切るがそれも少しすると繋がってしまい、頭を撃とうが首を切ろうが再生してしまう

さらには、相手の攻撃はこちらに効くのだこれでは埒があかない、少女たちは信号弾を打ち上げ時間を稼ぎ援軍を待つことにするがあまり長い時間は持ちそうにないのが現状だった、少女達は疲れが見え弾の残量も少なくなっているが、敵には疲れが一つも見えないのである。

(…チツ……… 完璧に赤字だ、それにそう長くはもたない、私の目でも捕捉することが出来ないとはどんな手練だ！？先生方は信号弾を確認はしているだろうがまだ此方に着くには時間が必要だろう、必ず赤字の分は請求し特別休暇も貰わないと割に合わない)

(何だ！？この術は、式紙の類なのは解るが不可解すぎる、あれだけダメージを与えたのに消えない上に依代が見当たらない)

・

・

二人は十数分戦闘を繰り返すが打開策が見つからず、徐々に追い詰められていく。

●
。
。
両手に拳銃をそれぞれ持ち弾幕を張る少女と刀を振るう少女は周囲を見ながら現状を冷静に観察し、自分にとって最悪の結末となる未来が脳裏に写りだす

（マズイな、手持の残弾数は少なく相方の体力と気は少なくなっている。コレは腹を決めるしかないか、ここは気に入っていたんだがな）

（このままでは助からない、私だけならこの囲いを一時的に抜けることができるが……引けば侵入を許しお嬢様を守れない……………必ずお守りいたします）

二人の少女に最悪の瞬間が迫ろうとした瞬間、空から何か落下してきた。

「c n n n やあ——ッ!」

ソレは頭の上一メートル辺りを通り過ぎ二人を囲っていた式神の一画に突っ込んでいった。

【ソレ】は当然、式神にぶち当たる。

どっ——「のげら」——ン

土煙と木ノ葉が舞い上がり一瞬視界が悪くなる。突然のことに啞然とし、隙ができるが相手の術者も式神も同様のようで墜ちたものを判断しようと目線が動く。

そして目の前に出てきた光景にその場、全部の思考は停止する。

凄まじい勢いだっただろう、巻き込まれた式神達の山が出来ている。その上部に上半身から突っ込んだ為に歪なV字ように二本の足が生えて空を指す下半身があり、二本の足はピクピクと痙攣をしている。

犬 神 家

誰も彼もが一瞬思ってしまった。そして皆その光景から現実逃避し、先ほどの続きを再開しようと考え始めた時。

歯車と世界がネジレ、始まりの一步を踏み出す音が鳴った。

「あゝあゝ、今回はホンマに死ぬかと思った!！」

それはとても信じられない音だったが。

墜ちてきた【ソレ】はそのまま何事もなかったかのように犬神家から上半身を引き抜き、勢いをつけたまま背面の方に倒れ込む。そして上半身を起こし周囲を見回して……… 疲れ、幻覚でも視ているかのと目頭抑え瞼の上から軽く両目をマッサージして再度確認をしている

桜咲 刹那が状況判断に困り、現実逃避し思考を再起動中に、龍宮 真名は男を観察し思考する

（墜ちてきて、敵の囲いの一部を崩潰ほうかいさせた男。相当に頑丈らしい、敵対しないことを願いたいな）

男は今の状況を周りが無反応なのをいいことに一人考える

（えゝ周りは、顔面から落ちた俺に驚いている様子の女性？と女の子。さらに周りを囲っている下級式鬼の皆さん どないなつとんのや、文珠を使ってあの空間から『次』『元』『脱』『出』をしたはずなのに……ココどこやねん」

男が周囲をキョロキョロと見回し首を捻りながら一言とつぶやいたのを龍宮は観察し更に思考する

（これだけの異形のモノに囲まれて、取り乱してないのは凄いが何か変だ、裏の世界の人間ではなく魔法世界の住者か？…しかし、見た目は表の一般人なのに不思議と懐かしい感じがする）

男は考えがまとまったのか、立ち上がり体の砂埃を払いながら周りの状況を全く無視してコチラに歩いてきた、少し困ったような笑

顔で頬を搔きながら

「あゝお嬢さん方、少し聞きたいことが有るんやけど、デザート的美味いお店に案内してくれない？」

まるで、ナンパで声をかけるように、周りの式神達を完全に無視してこちらに話しかけてきた。

これには敵達も思考停止が溶けるほど男の言動が頭に來たようで、一斉に武器を構え崩壊した壁を塞ぎ範囲を狭めるように動き出し、男と私達は分断される。

男は式神達に囲まれて怯えもせず逆に周りの式神に文句を言い出した

「コラー、なぜジャマをするんや、お嬢さん方と話がきんやないか!？」

男は叫ぶと同時に自分を囲っている正面に向けて右手を突き出すのが式神達の間から覗き見えて

手が淡く光り、掌^{てのひら}から光が溢れ出し

肘から先が光に纏わり光る腕となる、

手首から先に光が集まり、光る剣となる

男が右腕をひと振りすると

ーボンッボンッボンッボンー

式神が数体消え去る

そのまま周りを囲っている式神達の攻撃を

時にヒラヒラと右へ左へ時にカサカサと前へ後ろへと避けて周りの式神達を確実に抜っていく

真名は自分で見たものが信じられないでいた

（私の魔眼はダメになってしまったのだろうか、あの男の手に纏っているのは霊的なモノ、私が弾丸に霊的な術を施すのでも一時間近くかかる、しかも霊的な術のみで物質化までしているアレ、一体何者なんだあの男は）

刹那は叫び声のする方を反射的に見て、式神達の隙間から見える男が振るった力に恐怖を感じていた。

——アレハナナダ——

——ジブントハンブンニタモノガカンタンニキエテイク——

——ソレヲフルウアノオトコハイッタイナナダ——

——マナノダンガンニニタヨウナチカラハアルガアレハアノオトコハイジョウダ——

——アレハワタシヨリバツ——

刹那の恐怖が最後の答えを出そうとした時、男の声で現実引き戻される

「コオラ——ッ！おっさん——っ！——ソコに隠れとんのは解つとんのや出て来んかい！！」

男はそう言うと同時に、——ビシ！——と指を一本の木に向かって指す。

式神を使役していた術者は焦る

（——なぜ自分の場所がバレた！？——なぜあんな普通の男に見破られたのか）

そう思うのは当然で術者が使う隠密の術は探索から対象を隠すのではなく、見えにくくする術であるために発見がしにくい、さらに科学を使って底上げをするためにとっても発見がしにくい術である

（早くあの男を始末しないと——ッ）

術者の思考は其処までであった。

真名が残弾の全てを撃ち込み、刹那が気を全力で木に叩き込み、男が光る六角形の板を木に投げ込んだ

男が二人の方を向く、右手は先程までの光を纏っていない

しかし二人は得物を手にして警戒を解かない、先程の力を使われれば自分達は無事では済まない。何者かも解らない相手に目の前の男のように無用心に近づけない。

男は先ほどと同じように少し困ったような笑顔で頬を掻きながら

「——あゝお嬢さん方大丈夫やったか、疲れとるとこ悪いけどココが何処か教えてッ——」

男はそこまで言っただとたん二人の方に低い跳躍で飛び込んでき、

二人の手前1メートルに半捻りを入れて着地する

二人に背中をむけ自分がいた場所の更に後方を見ると同時に両手に六角形の板を出現させ飛んでくる何かに対して両手を出し弾いていく

男が先程いた場所にメガネをかけ無精髭を生やした男性が現れた

男性はこの麻帆良学園で学園長に次ぐ最強の魔法先生

たった一人で学園内の幾多の抗争・バカ騒ぎを鎮圧した広域指導員である死の眼鏡デスメガネ

その正体は麻帆良学園中等部2年A組の元担任 高畑・T・タチ
ミチ

彼は元自分の教え子が心配になり他の侵入者の後始末を同僚に任おしづけ

男は守った相手から盛大に攻撃をされ、頭から血をダクダクと流し悶絶したままピクピク痙攣する

先程までの緊迫した空気から一変^{シリアス}なんともいえない空気が流れるなか

真名は仕事の相方に攻撃された男を視線を下げ見たあとに……いくらなんでも、コレは殺りすぎだ——などと考えながら視線を元担任の男性に向け事情を話した

先ほどの信号弾の侵入者は撃退をしたが、何者なのかが解らない男が乱入してこなければ危なかったと告げる

真名とタカミチは一太刀を浴びせて倒れているであろう男の方を見ると男は既に先程のダメージから回復しこんな森の中で刹那に正座させ――

「いいか嬢ちゃん、いくらギャグやからいうても、痛いのは痛いし！！死ぬときは死ぬんや！！——よく考えなあかんで！！」

「しかしッ——」

「しかしも、かかしも、ありゃあーせんのだ！第一ワイやなかったら死んで殺人事件やぞ！！」

――よくわからない説教をしていた

タカミチは苦笑いを浮かべつつ、正体の解らない正座をしている男に事情を聞くために話しかけることにした

「えーと、お話の途中のところをすまないが少し聞きたいことあるんだが…僕の名前は「高畑・T・タカミチ」まずは君の名前を教えて欲しい」

右手を前に出し握手を求める形をとる、しかしそれを聞いた男は今まで正座していたところから飛び退きさきほど見せた光る手を出した時と同じように右手を構える

「ええ加減せーよ！！そないなと言われてハイそーですかなんて聞くんと思うか！？戦闘態勢が解かれていなのにワイはそこまでお気楽やないぞ！！」

タカミチはもうひと悶着あるかと左手をポケットに入れ右手を下げる

刹那は正座の状態からすぐさま立ち上がり太刀を構え元担任の元へ下がるが真名だけが何の対応もしないまま状況を眺めて「さて、どうしたものかね……」などとつぶやいている

刹那は真名の行動を不思議に思い小声をかける

「真名、なぜかまえない」

しかし返ってきた答えは意外なものだった

「弾切れだ、それにあの男相手に今は警戒は必要が無いと思うぞ」

「しかし何者かがわからないのに——っ」

真名がくちびるに人差し指を持ってゆきその後対じする男を指差すことで、刹那の反論は途中で遮られた

男はいつの間にか右手を握り締め人差し指を向け指し示したまま
タカミチに啖呵を切り出した

「いきなり殴りかかってきて、あやまりもせんと「聞いたことがある」だあ、ふざけるな最低でも頭下げて謝るのが先やないか——っ、そんなこともせんのは、謝る気も自分のミスも認める気がないからやそれが大人のする態度か！？ワイなら土下座しとるぞ——っ、それとも何かイケメンなら何しても許されると思うとるんか——ッ」

この言葉にタカミチと刹那は啞然とし、真名は口元を抑えて笑っていた。正論をぶつけられたタカミチは男に頭を軽く下げ謝罪を述べた

「すまないね、彼女たちが救援信号を出していたものでね、君を侵入者だと思って攻撃をしかけてしまった、本当にすまない」

男は謝罪を聞いて小声で何かを呟いたあと、真名と刹那の方を向き

「この後、一緒にお茶でも——」

そう言いつたところで、いきなり三人の視界から消え失せた

三人はいきなり消えた男にまだ侵入者が残っていたのかと警戒し
辺りを見回すと

「ワッ——ワイはッ——ロリヤッ——ないんッや——」
——ゴン——ゴン——ゴン——ゴン——ゴン——

少し離れた所で生えている木に頭突きをしている男がいた

三人が驚きと現実逃避から帰ってくる間、頭突きは数分続いていた

タカミチが気を取り直して男に話しかける

「さつきと同じ様な質問になるんだけど、まず君の名前と誰なのかを教えてくださいませんか？」

話を促された男は自分のコトを軽く話す

「名前は横島忠夫、職業はGS、身元の確認なら美神令子除霊事務所かGS協会かオカルトGメン日本支部にしてもらえばはっきりするんでソツチに——」

しかし横島の話は途中で

「口を挟んですまないが横島君、僕は先程の事務所や協会、支部は聞いたことがないんだが」

信じられないことを言われる

「……えっ!!、本当ですか!?!……じっ……じゃあ、四年前の核ジャックと大霊障災害は覚えてますよね」

「核ジャックと大霊障災害!?!そんなことは聞いたこともないが、……桜咲君、龍宮君、君達は知ってるかい?」

「私はそのような事件は無かったと思いますが、あれば忘れませんし」

「先生、私はその頃はコチラに居なかったのだがアチラでも聞いたことがないが」

「」「」.....「」「」

四人の間に沈黙が流れる

横島は頭に大きな汗を浮かべタカミチの方に顔を向けると

「.....えーと、タカミチさんちょっと確認なんすけど...ココはどこっすか!？」

聞かれたタカミチは当たり障りのない答えを返す

「ココかい!？ココは埼玉県麻帆良市にある麻帆良学園都市、麻帆良大学近くの森だね」

帰ってきた言葉に、横島は足りないと自覚している頭をひねった

(ワイの覚え違えでなければ埼玉県にそんな場所はなかったはず、もう少し様子見んと判断できんが)

「最近できた場所っすか？」

タカミチも話が噛み合わないのを気にしながら答える

「いや最近出来た場所では無いよ、えーと確か明治の中頃から学園都市の前進はあるから古くからあるというほうが正しいね」

更に横島が質問しようとするのを――

――P i r r――P i r r――
――ヴウウン――ヴウウン――

――ケータイが遮った

「すまない電話だ。――はいタカミチです、――はい確かに解決しました。――はいわかりました。あゝ横島君、すまないが僕達についてきてくれないかな、僕の上司が君に会って話をしたがつているんだ」

電話を受けたタカミチが通話口を押えながら聞いてくる

それに対し横島は軽く受け答えをする

「いいつすよ、ココよりお偉いさんが居るところの方が色々と楽らくそうですし」

横島の返事を聞いたタカミチは電話の相手と再度言葉を交わす

「――学園長、彼は承諾してくれましたのでそちらに向かいます、――はい伝えときます、それでは」

タカミチは電話を切りそのまま龍宮と桜咲の方を向き

「わるいね、学園長が「二人にも状況を聞きたいから今から来るように」とのことだ」

学園長の気まぐれな鶴の一声で、四人は学園長室に向かうことになった

この時、確実に世界は少しだけ道を枝分かれし進み出した。
ルート ふみはずし

それは、新しい世界で歯車がネジれて紡ぐ物語。

レポート1 ビギニングデイズ（後書き）

朱月です

こんな作品を読んでいただいております。

話のキリが微妙な処ですがコレで1話は終了です。

続きに関しては打ち込みは遅いですが、誠心誠意打ち込んでますので気を長くしてお待ちください。

話が変わりますがこのお話R15が入ってます。

一応毎回入れるような状況があるわけでは無いと思います（希望的観測）

しかし今回はいれさせていただきました。

美人局↑コレの為だけに入れてるようなもんです。

それでは次回、レポート2でお会いできたら会いましょう

レポート2 キメる時（前書き）

落ちてきた男は新しい世界で歩き始める事を

出会った少女は大切なものを守る事を

話した少女は自分の考えを

戦った男は無視をすることを

話した老人は力か情か

横島忠夫、四年間で成長【は】してます（多分）

追記

今回非常に学園長の口調で違和感があると思いますが見逃してください

レポート2 キメる時

タカミチが扉をノックし中にいる人物に話しかける

「学園長連れてきました」

タカミチはそう言いながら扉を開け中に入り、その後を真名、横島、刹那と連なるように入っていく

部屋に入ると大きな机に一人の頭の長い老人が蓄えた髭を撫でながら声をかけてきた

「ふおおおおご苦労じゃったの、タカミチ君……彼がそうのう？」

タカミチは老人の問いに横島たちに背を向けたまま答えた

「はい学園長、彼が今回急遽協力してくれた（横島 よこしま 忠夫）君と彼女達

が、今夜現場の警備を担当していた二人です」

それを聞くと学園長は、タカミチを呼び寄せ横島に少し時間をもらう言葉をかける

「タカミチ君、少しいいかの。…お客人よ、少々そのまま待っていただけるかのう」

横島はかけられた言葉に少し反応が遅れるものの学園長と呼ばれた老人に――

「…はあ、それはいいすけど、話なら一度外に出ましようか」

——自分の後ろを親指で刺しながら答える

「いやかまわんよ、そこまで内密の話では無いのう」

そう言つて横島から視線を外し、自分の近くに來たタカミチと小声で話だす

横島は何かしらの報告だろうと今までの経験から推測し二人のやりとりを放つて置き、純粹に自分が氣になった事を自分の右少し前方で立っている真名に小声で聞いてみる

「なあ、真名ちゃん少し聞いてもいいかな？」

真名は声をかけてきた横島に自分の暇潰しもかねて気安く答える

「なんだい？横島さん」

刹那は真名に声をかけた横島を少し警戒しつつも出方を伺うように神経を研ぎ澄まし聞き耳を立てる

横島は軽く答えてくれた真名に質問をする

「ホンマに日本人か？妖怪ぬらりひょんとか福祿寿の南極老人とか古代の頭の長い人種の生き残りとかエイリアンとかじゃないよな、あの学園長」

聞かれた真名と盗み聞きしていた刹那の体が一瞬ビクと動く、横島はそれに気づかず首を傾^{かし}げ、ブツブツと——「レントゲンは…長い頭蓋骨…脳みそはどこまで…」——呟きながら考えている。

そんな漏れ出ている思考の言葉を聞いてしまい、真名は噛み締めるように横島の質問に答える

「プウ……いや、にんげうつ……ウウツン……人間……のはずだ」

それを聞いた横島は、真名の言葉を疑いもせず、急に興味を無くしたように部屋の中を見回し

気になったことがあればその都度真名に軽く訪ねていった……殆どくだらないことだったが。

刹那はやりとりを見ながら、些細なことだが自分の心に疑惑が積もっていくのを感じる。

（最初は学園長を妖怪か何かかと聞かれた時、正体が露顕したかと胆を冷やした……しかしそのあと此方に向いて話し掛けてこないのは……なぜだ？……この男の軽薄な態度なら此方にも話しかけてきてもよさそうなものだが……まさか、あの質問はこちらの情報を知った上での……お嬢様に害をなすなら即刻叩き斬らねば）

いろいろ考えつつ刹那が新たに決意を胸に秘め学園長から声がかかるまで、一切、横島は声をかけなかったというかかけられなかった。

理由は、眉間に皺を刻みながら考え事と自分を睨むように見てくる様に見える美少女に内心色々——（ツツモタセ発言と説教が駄目だったかな——）——考えながら、学園長の後ろにある大きな窓に映る刹那を見ながら刹那に話しかける話題の為に無い頭を絞っていた。

タカミチとの軽いやりとりの後、学園長は入口から近い場所で真名と話している横島へ声をかける。

「お待たせしたようじゃの、お客^{はな}人よ、そのまま立つて話もなんじあろう、其処のソファアにかけて話しを聞かせてもらえんじやろうか」

横島は、いまだ名前を呼ばれずお客^{はな}人と呼ばれる事と先程のぬらり……学園長のセリフに色々と思うところもあるが自分の靈感がざわめかないのを信じ、いつものように腰をかける。

「ほんじゃまーしつれいして」

学園長は横島が腰をかけたことに口を綻ばせ今までしていなかった自己紹介と質問を投げかける

「先程から聞いてのおる通り、ワシがこの学園都市の学園長^{このえ}近右衛門^{このえもん}じゃ」

「…さて、横島 忠夫君、まず君が何モノかソレをおしえてくれんかのう？そしてどうやってこの学園の中心近くに表れたのかも」

「はあ…何者かって言われても…えーと…名前はさつき言われた通り 横島 忠夫 職業GS・現在オカルトGメンに派遣中、身分の保証に関しては東京の美神玲子除霊事務かオカルトGメン日本支部に問い合わせてくれれば――」

そこまで答えて横島は言葉に詰まりそこを学園長に口を挟まれる

「すまんが横島君、ワシは美神玲子除霊事務やオカルトGメン日本支部なんぞ聞いたことないのう」

横島はここに来る前に頭に過ぎった自分の状況を憶測で語り出した

「あー仕切り直して話します、まずはこの世界の住人じゃないです俺は、ここに来たのは仕事中の事故で不法侵入とかは勘弁してもらえるとありがたいっすね、それと元の世界では国家資格を取って対魔師みたいな仕事していました、後――」

横島が次の話を言いかけた所で学園長が質問をする

「この世界の住人じゃないとな、では魔法世界の住人かの」

横島は聞いたことのない言葉に自分の世界の常識と照らし合せ話に注釈を入れていく

「魔界などの行き来ができる異界とはチョト違います、SFにあるパラレルワールドに近いものだとおもいます」

その、説目に横島以外の全員が声を漏らす

「ふお！？」

「な！？」

「ほう」

「え！？」

横島はそんな反応を気にせずそのまま淡々と話していく

「えーと、こんな与太話の様な話を話す理由があります。一つ目は、ここに来る前にタカミチさんに聞いた、四年前の【核ジャック】と【大霊障災害】この二つを世界中の人間が忘れるはずはないですよ、世界中で大きな被害が出ましたから。それを知らないのは四歳以下の子供ぐらいです。二つ目は先程のきかれた【魔法世界の住人か】

という質問です、こんな質問があるということは魔法が使える人が生物もしくは種族がいるということになります、そうですね学園長？」

学園長は聞かされる話をどう判断するかを迷ってはいたが後で対処できると考え質問に答えた。

「確かに、魔法を使える魔法使いと呼ばれるモノが居るの。ワシもその一人じゃ」

横島は確信を得たように続きを話し出す。

「学園長もということは複数もしくは大勢居ることになりますが、魔法使いがいるのが大きな違いになります、俺が居た世界では魔法使いは一人だけでしたし、その魔法使いも魔女狩り前の魔法を復活させた功績込で現代の魔女と呼ばれている人ですし」

学園長は話を聞いて髭を撫でながら今までの話を考える、（嘘をつく様には感じられんが……様子を見るかしかないのう）

学園長と横島の会話は続いていく

「此方に事故で来たとのことじゃが、自分で帰還は出来るのかの」

「其れは……無理っすね今のままなら救援を待つ選択したほうが安全ですし」

「救援をまつと、来るのかね？」

「多分、としか言いようがないっす」

「それまでの生活はどうするのじゃ？」

「野宿とサバイバルで一週間ぐらいは待ちます、それ以降は…モグリの仕事でも探しますよ」

探りを入れるために話を変える

「ふむ、話は変わるが横島君は警備の彼女ら二人を助けた警備の二人は横島君に助けられたのは間違いなのじゃな」

横島は頬を掻きながら

「成り行きで」

その問いに刹那は聞かれるままに答え

「はい、助けられました」

真名は一度横島の方をチラリと確認し答える

「…ああ、それで間違いない」

そのまま学園長は警備の二人に話を聞いていく

「タカミチ君は光る盾の様なもので戦闘をしたと言っておったが、それで助けられたのかのう？」

またも刹那はすぐさま返答していく

「いえ、違います。光る剣で助けられました」

しかし、真名は聞かれたことで先程あった戦闘を思い出しているのか口元に手を当てて思い出し

「……そうだな、最後の術者を倒す時に同じもの？を投擲していたようだ。窮地を助けてもらった時は光る腕から生える剣だったな」

補足して答える

学園長は先程まで髭を撫でていた手を止め、右の眉毛が少し上がる

「横島君差し支えなければこの二人を助けた技とタカミチ君と戦った技を見せてくれんかのう」

横島は別段見られて困るものではないので軽く自分のサイキックソーサーと霊波刀を見せる

「これがサイキックソーサーでこっちが霊波刀です」

左の掌に付かず離れず、浮き続ける六角形の盾・右の腕には光が纏わり籠手から光る剣

目の前で披露される、魔法でも気でもない【何か】が目の前で光りながら物質化している

その【何か】に目が釘付けになる

部屋に不意に訪れた沈黙を学園長の提案が破る

「横島君やどうかのう、救援が来るまでの間、この学園で働かんかの？」

横島にとっては渡りに船、タカミチや警備の二人には寝耳に水の言葉だ

その言葉に横島はすぐに飛びつかず苦笑いを浮かべ、頬をかく

「いやー急にそんなこと言われても、すぐに答えられないっすよ」

学園長はその言葉を待っていたようにニヤリツと笑い

「ふおお、性急過ぎたようじゃの……うむ、今晚はもう遅い皆帰ってもらって構わん、それとタカミチ君、横島君を野宿させるのは忍びない、君の所に泊めてやれんかの？」

自体を静観していたタカミチに話を振る

声をかけられたタカミチは無精髭を少し弄り

「……横島君が良ければ僕は問題ありませんね」

昔の横島ならココで男はイヤじゃーとでも叫んで真名あたりに飛び込んでいるところだが、四年の歳月は彼に変化とも言える成長をもたらして――

「…タカミチさん、一つ聞いていいっすか？」

「なになな？」

「家に風呂つて有りますか？できれば風呂につかりたいんで」

「……………ああ、あるから好きに使ってくれて構わないよ」

——いたが、少し変な成長だった

学園長はそんなやりとりを横目に見ながら警備の二人に先に帰る様に促す

「二人とも遅くまでご苦労じゃった、また何かあれば呼ぶでの中」

「はい、分かりました、失礼します」

刹那は答えるとそのまま学園長室から出ていく

「学園長、今回の赤字分を出してくれれば次も快く引き受けよう」

「ふおっ……………分割でいいかのう？」

「構わない、それじゃあ請求書は後日持ってくるので、また仕事で」
今度

そう言うのとゆっくりと学園長室を出ていった

横島とタカミチの話し合い？が終わった頃学園長は二人に声をかける

「横島君、明日またココにタカミチ君と顔を出してくれんかのその時に先程の返事を聞かせてくれんかの。それとタカミチ君と話があるでの、少し外で待つといてくれるか」

学園長はそのまま机から紙の束を出してタカミチを近く渡し話し始

めた

横島は待っていても仕方がないので学園長室から出ていった

ガチャ……バタン

「……！！……なんや、真名ちゃんかいな、ハア……驚かさないでくれよ」

横島が扉を閉じると薄暗い廊下の壁に背中をあずけ真名が佇んでいた

真名は横島が驚いた姿に一瞬軽く微笑み

「驚かしてすまない横島さん、少し聞きたいことがあるんだが、いいかい？」

次の瞬間には真面目な顔で話しかけてきた

横島は真名の顔を見たあとに軽い感じで答える

「何かな？俺に答えられることならいいけど」

真名は先ほど警備から帰ってくる途中に拾った弾（一度打ち出した改造エアガン用）を右の手の平に置いたままつき出して

「この弾に先程の力を込めて残す事は出来るかい？」

横島を試すような問い方をした

「へ！？」

横島は内心、どんなことを言われるか怯えていたがえらく簡単な事を問われ驚いてしまう

真名は横島が出した間抜けな声に説明が足りなかったと自己完結し改めて説明使用とするが信じられない、言葉で遮られた

「そんな簡単なことなの聞きたいことって？」

そう言いながら真名の手の平から弾を摘み取り手の中に握りこんで霊力を込めていく

真名はそれに驚く、自分が霊的術を弾に込めるのには時間と高価な材料かかるそれを目の前で横島は簡単に行なってくそして

「はい、コレでいいかな？」

差し出された弾には信じられないほどの力が込められていた

「……………あぁ、コレで十分だよ」

込められた力に驚きすぎてすぐに返事はできなかったが、真名は驚きを隠して横島に受け取った弾を見ながら更に聞いていく

「コレは込める力を少なくして弾の数を増やすことは出来るかい？出来るのなら今後もお願いしたい、勿論、今後は仕事として頼むか

ら無茶な料金でなければ買い取らせてもらつよ、どうだい横島さん、コチラで生活するにはお金が入用だろ？損はさせないよ」

横島は真名に取引を持ちかけられるが少し考えて

「…あー…金は要らないからさ、真名ちゃんが高校生になったら俺をデートへ誘ってくれよ」

人懐っこい笑で擲掬^{かいつか}うように真名へ言った

自分の顔が熱くなつたのを感じた真名は、廊下が薄暗い事に安堵し照れ隠しと仕返しに横島へ疑問を投げかける

「横島さん、デートは今の私ではだめなのかい？」

身長差から真名が上からのぞき込むように聞いてくる。

横島はそんな真名の頭に手とポンと乗せてワシャワシャと無でだした。

真名はいきなり頭を撫でられ固まる、それを気にせずに横島は喋る。

「真名ちゃんは今もベツピンさんやけどもつとベツピンになつて誘つてくれると俺が嬉しいな、それに来る途中で聞いたけど中学生のお子様がそんなこと言ったらアカンで」

そう言つて何時の間にか撫でるのが止まっていた手で頭をポンポンと軽いたたき手を離す

ガチャ…バタン

「横島君、待たせた——龍宮君どうしたんだい？」

タカミチは学園長との話が終わり部屋から出た所で、横島に声をかけたのだが居ると思ってなかったが龍宮が居たために疑問と共に声をかける

真名はかけられた声に

「先生か、なに私自身横島さんに聞きたいことがあってね」

動揺を隠し

「有意義なことが聞けて愉しかったよ」

ゆっくりと距離をとる。そして、目の前の男に

「横島さん、ありがとう」

柔和な微笑みを浮かべて立ち去っていった

お礼を言われた横島は一人壁に向かって

「仏説摩訶般若波羅蜜多心經ワイは觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時
やない照見五蘊皆空度一切口…苦厄舍利子ワイは口…やない色不異
空ワイは…やない空不異色…は口りやない色即是空ワイは口…
……空即是色ワイは口りやないワイは口りやないワイは口りやな
い」

何かを必死につぶやいていた

タカミチは元生徒の見たことのない笑顔と自分の横で壁に向かって
何かを呟いている横島を見て……

一度頭を振ると、横島の襟首を掴み引きずって帰宅することにした。

翌日

横島とタカミチは学園長室にいた

目の前には学園長が椅子に腰掛け髭を撫でながら横島に昨晚の答えを聞いてきた

「横島君、急かすようで悪いがの、答えを聞かしてくれんか？」

横島は自分の考えを話す

「…お話は受けようと思います、ただ警備の仕事をする事になると条件があるんですけどいいですか？」

机を挟んだまま横島と学園長は話しあう

「…うむ条件か、なんじゃね」

「俺が保護したモノに関して手出し無用でお願いします」

「保護したモノに手出し無用とな、それは動物などのペットかの？」

「違います、元の世界でやっていたGSの仕事にあった権利です」

「GSとは対魔師だと説明しおったとおもったが、記憶違いかろう？」

「いいえ、記憶違いじゃないですよ。ただ職業上、一人で解決できない場合は契約上力を貸してもらったり使役したりありましたし、こちらに害悪がない限りは保護しようかと思っっているんですよ」

学園長は先程まで判断が困っていた横島に一般の魔法使い達には無い可能性を感じた

「……そうゆう理由なら致し方ないかの、ただし責任は横島君一人が取ることになるがかまわんのか」

「いいつすよ、元の仕事場でも同僚に人狼に妖狐、元幽霊や元魔族なんてモノもいましたし」

「ふおおおお……なんとも奇妙奇天烈な職場じゃったんじゃの」

「……ハハハ……まー否定はしませんかね」

約束が交わされたところで学園長は横島に確認をする

「うむ、ところで横島君、仕事以外で他に資格や得意なことはないかいの？」

「資格や特技っすか？」

「警備は裏の仕事となるので、資格や特技によっては表の紹介できる仕事も増えるでの」

「そうっすね、資格は大型自動二輪、普通車、小型特殊がコッチでも使える一般的な物ですかね、特技は手先が器用なことで二歳から五歳児までなら簡単な子守くらいなら出来ますね」

「手先が器用なのと子守のう……タカミチ君、彼を臨時の職員として保育園か学校、それと広域指導員を兼任してもらおうと思うんじやがどうかの？」

学園長の脇に控えていたタカミチは自分が口を出せるコトのみに答えてく

「そうですね……僕としては、広域指導員は歓迎ですとしか答えられませんが。学校職員は学園長判断ですし、保育園は職員採用に関しては園長が判断していますから」

それを聞いた学園長はとぼけた老人の様に聞き返す

「そうじゃったかの？」

タカミチも余計なことを言えば学園長に暇つぶしを与えてしまうのも分かってる

「そうですよ、学園長」

簡潔に答えたタカミチに、学園長は何かを呟きながら机の引き出しから紙を数枚取り出し、そのまま記入しだす。
面白くないのう

数十秒後

「……タカミチ君、すまんが横島君を先に保育園の園長に挨拶に連れていってくんかの、その間に必要書類を手配しとくでの」

「わかりました、それじゃあ行こうか横島君」

学園長に言われたタカミチは返事と共に動き出し横島に声をかける

「了解つす、それじゃ学園長失礼します」

——ガチャ……………ボタン

声をかけられた横島は挨拶を残しタカミチと一緒に保育園に向かうために学園長室から出ていった

レポート2 キメる時（後書き）

作者です、ここまで読んでくださいてありがとうございます
年末年始の休みをフルに使って書き上げました、自由な時間は使い
きりましたので、次の話まで時間がだいぶ空くと思いますすが気長に
お待ち頂けると嬉しいです。

ではまた次話、第3話でお会いできたら嬉しいです

2012/1/3/18:00頃誤字脱字を修正

レポート3 アナタハーカミヲーシンジマスカ？（前書き）

異世界に落っこちた横島は新しい就職先候補へタカミチと一緒に赴くこととなった。

けれども四年間で成長しても、横島は邪でヨコシマな横島でしかない。

そんな彼が歩く道は静かには歩めそうにもなく……

レポート3 アナタハーカミヲーシンジマスカ？

タカミチの案内で目的の保育園までやって来た横島

受付兼事務所の様な部屋の前まで行くと中から一人の女性が出てきた

「あら、タカハタ先生何かご用事ですか？」

声をかけられたタカミチはそのままできた女性に目当ての人物の場所を聞いていく

「こんにちは那波君、すまないが園長先生は何処に居るかな？」

「園長先生でしたら、先ほど倉庫の鍵を取りに来たので奥の倉庫にいらっしやるかと」

タカミチはそれを聞くと、横島の方を向き

「横島君、ここで彼女に入園許可書もらって待っていてくれ、僕は先に話さないといけないこ

とがあるから倉庫に行って連れてくるよ」

そう言うと、タカミチは横島の返事も聞かずに歩いていった。

残された横島は那波の方を見て苦笑いを浮かべていた。

「えーと、那波さん入園許可書ってどうすればいいの？」

「あらあら、それではこちらの入出園管理書に名前を書いてください」

クリップボードを差し出され横島が名前を書いて返すと、那波から首からかける許可証を渡される。

「帰るときに返却してくださいね、それではこちらになります」

そう言うと、園児たちの遊ぶ姿が見える一階のテラスに案内される。

そこまで案内すると横島に一言かけて、

「ここで少し待っていてください、副園長に話してきます」

そのまま那波は近くにいた保母さん達の元に歩いていく、そして作業をしていた彼女に声をかけ事情を説明していく。

那波が自分の立っている場所まで帰ってくるのを横島が待っていると、何かがズボンの膝裏の辺りをクイクイ引っ張る。

横島が何だろうと思って後ろに目線を向けるとそこに数人の子供とズボンをつかんでる一人の女の子がいた。

何となく少し前の日常を思い出した横島は女の子の前にしゃがみ話しかけてみた。

「どーした、お譲ちゃん」

お譲ちゃんと呼ばれた女の子は横島をジッと見つめ、保母さんには聞いてもらえないお願いを横島にしてきた。

「おじ……おにいちゃん、かやぐるまして」

どうやら、少しだけ他の子より心配りができるようだ

—— 那波が保母さん達と話を終えて帰ってくると、横島の周
りには、子供が纏わりつき群れていた。

ちづるは、子供達を手馴れた感じであやしていく横島に一つの疑問
が浮かぶ

「横島さん、育児経験があたりですか？」

横島は少し前まで当たり前だった日常の思い出を思い出しながら話す

「前の仕事場にね、年の離れた妹がいる人が居たから少しね、好奇心旺盛で元気いっぱいだったよ。俺としたらちづるちゃんが若いのに子供のあやし方が上手いのに驚きだよ」

ちづるは、子供達の相手をして一度も自分を見ない横島に、笑顔を浮かべながら謙遜する。

「そんなことないですよ、子供が好きなのでですから」

笑みを浮かべて話をするも、内心は少し落ち込んでいた。

——彼女を勝手に形作る——

この人も……また外見の事を、

——残酷でやさしい——

そして……また年齢の事を、

——悪意の見えない——

……いやだ。

しかし横島から出てきた言葉は千鶴の予想を裏切った

「そおかな？俺^{わい}なんて自分が中学生の時はまだワルガキやったから
な、ちづるちゃんはスゴイと思うぞ」

千鶴は言われた言葉に固まってしまいが、横島はそれに気づかず子供達を遊びながらあやしていく。

理解が追い付いた千鶴は慌てて横島の正面に回り訪ねていた

「なんで知っているんですか？」

「へ？」

「だから、なんで知っているんですか？」

横島は聞かれたコトが解らないが、自分に原因があることは明白である、自分の言動を必死に思い出し、あることをおもいだした。

「急に下の名前で呼んでゴメンな、子供らが先生達を名札の名前で呼んどったからつい、知らん人から急に下の名前で呼ばれるのが嫌やったんやろ」

そう言つて横島は頭を下げるが千鶴は少し困つてしまふ、故意や親友を揶揄う訳でなく自分の動揺と説明不足で勘違いさせて謝罪までさせてしまったから……

「……いえ、下の名前で呼ばれるのは構いません」

「そ、そんなこと言つて無理してない？」

千鶴の軽く伏せられた顔から聞こえる元氣のない声を聞くと、横島としては心配ではあるが自分に原因があることは明らかで話を聞き出すことができない。

二人の間に園児たちを置き去りにした微妙な沈黙が漂い始めたとき、千鶴は顔を上げ横島にもう一度、自分の疑問をぶつけた。

「なんで、私が中学生つて知っているんですか」

那波^{わたし} 千鶴は他人が見れば下は高校生から上は子持ちの新妻まで、

間違っ容姿なのに

……………どうして分かったんですか？

——想いを込めた疑問——

それに答える横島は、えらく普通のことを聞かれボケて空気を和ませうとしたのを忘れ、真顔で答えてく。

「最初はタカミチ先生と親しく話してるから元生徒で大学生くらいかなって思ったんやけど、なんか違和感があつてな、うーん何でやる、そう思った…^{靈感}しいて言うなら【直感】かな」

千鶴は驚いてしまう、そんな理由で外見から導き出される偽り答えに飛び付かず、横島が本当の答えにたどり着いたところに。

「直感……ってそんな理由なんですか」

洩れ出た彼女のつぶやき、不思議がられる理由がわからない横島は

一人首をひねりながら考えた、そして千鶴が納得できる理由を思い出す。

「……………うーん、少し前にな笑ってる子がいたや」

急にちがう話題を振られ戸惑う千鶴は横島に怪訝な（けげん疑問を浮かべた）表情を向ける。

それを気にせずに横島は続けていく。

「けどな、その子は無理して笑ってるんや意地張って」

千鶴は動けない、それは横島が千鶴のその向こうに誰かを見ながら話しているからか

「今にも泣き出したいのを回りに気づかれたくなくて、じっと耐えてるちっちな子」

それとも、千鶴自身が映る横島の瞳に何の色もないからか

「その子とさ、千鶴ちゃんが話してる雰囲気似てたんや」

「たぶんそれで違和感があったから中学生って当てられたんやと思うで」

千鶴はそこまで聞いて、横島は不思議で優しい人なんだと考えた。

この時は

千鶴の表情で疑問の答えに納得したと考えた横島は近くを通りかか

った保母さんに子供を肩車して声をかけにいった。

「その保母さ～～～ん、今日のお仕事終わったら呑みに行きませ
んか～～～～」

ピ
キ

#

千鶴は先ほど横島へ下した評価を【不思議で優しい人】から【女たらし】に変更し彼に近づいていく。

今、横島は肩車していた子を下ろして保母さんと話していた、それを視界におさめると千鶴は後ろから声をかけた。

「横島さん#」

保母さんが青くなっているのも気にせず、横島はのんきな声とともに振り向き、

「何や？ちづるちーっ」

千鶴は笑っていた、それはもう横島でも飛び付きそうになるほど二

ツコリと……但し、千鶴の体から黒く寒く恐い雰囲気かにじみ出す目の奥まで笑っていればの話だが……

心底、振り向いたことを後悔をした横島、オヤジもオカンに浮気が見つかった時こんな感じやったかなーなどと考える。

千鶴は笑顔のまま横島のすぐ前に立つと、子供に話すように横島の目を見つめながら

「あらあら、横島さん#ココは保育園ですよ##子供達のいる前で保育士の先生方を軟派なんて

しないでください###」

頬に手を当て首を少し傾げ、私は貴方のせいで困ってますよといわんばかりの状態で。

既に千鶴の気迫に圧倒され、保母さんも園児も周りから完全に逃げている。

そんな中横島は、その場を動かず、後頭部に大きな汗を浮べてはいるが表情だけは小さく笑っている。

「なんや、もう泣きそうやないんやな」

ごく近い距離でも聞き逃してしまいそうなつぶやき、

遠目に見た保育士には状況的に軽く引きつった笑い顔に見えるが、目の前に居る千鶴だけは違う顔にうつる。

横島の顔に彼そっくりで泣くに泣けない腕白な男の子が重なって見

えた。

千鶴は自分が見たものが一瞬理解できなかった、目の前にいるのは自分より年上の男性なのに自分の担任と同じ年くらいの男の子に見えたのだ。

横島は目の前にいる千鶴の表情が少しだけ驚きに変わったのに気づく、そしてまた自分の癖が出たのを理解する、どうにも恥ずかしく、雰囲気を変えたいのと照れ隠しの為に考え出た答えが、元の世界で失敗したナンパのセリフでボケるか折檻されギャグキャラの扱いを受ければ場が和む。

ハズだった、勝手に口から言葉が漏れなければ。

「泣き黒子の美人は見てて幸せやけど、泣いてる美人は辛いからな」

そついい終えた直後、少し後ろから声がかかる。

「おーい、横島君ここに居たのかい応接室に居ないから探したよ」

横島の所にタカミチと背の小さな着物を着たお婆さんがやって来た。

どうやら彼女が園長らしく、横島を軽く観察するしにっこりと笑うとタカミチの方を向き、

「ここからなら園長室の方が近いですので、そちらで話を聞きました
ようか」

ひと言告げ、横島とタカミチを置いて一人スタスタと歩いていく。

横島は逃げるように近くに居た子供達に「バイバイまたな」と挨拶すると、そのまま待つ^{おいていか}ていてくれたタカミチに話しかけると、そのまま保育園の建物の中に入っていた。

「千鶴ちゃん、ごめんけどコレを片づけ——っ、どうしたの顔真つ赤だよ!？」

他の保育士が千鶴に手伝いを頼みに来たが驚いてしまっ、彼女の顔はで風邪でも引いたように耳

まで真つ赤になっていたのだから。

その後、何を話しかけても要領を得ない千鶴から聞き出せた話と近くに居て現実逃避気味の新人保育士から話を聞き出したベテラン^{年輩}保育士達は二人の話をまとめるとある結論に至った。

其れは少し前まで居た【来客の男に一目惚れ】だ、子供の世話が上手で話も上手く、しかもその男は千鶴が中学生であることを見抜いたとか……これには職員一同驚愕だ。

そしてその驚愕の男について保育士たちは千鶴そっちのけで話し合いをしだした。

千鶴は職員たちの話を気にも止めずただ一人、タカミチ先生に何処の誰なのか聴いてもう一度話がしたい、と考えるのであった。

二人が出て行き数時間経ち学園長は書類に記入する手を止めると、自分の携帯電話を取り出し何処かに連絡を取り出した。

——ププププププルルル——プルルル——チャッ

「もしもしわしじゃが、今大丈夫かの？……ふむ、いやなに今日其方にタカミチ君が連れていった青年についてじゃ、…ふむ…ふむ…ふおふおふおそうかそれは愉しそうじゃの、……ふむ、分かった、ではそういうことでの」

学園長が園長への電話を切ると学園長室の扉がノックされる。

「学園長失礼します」

扉を開けながら入ってきたタカミチは手に書類を持っていた。

「タカミチ君ソレはどうしたのかね？」

タカミチは書類を学園長に見えるように持ち上げながら呆れて顔で答える

「学園長が瀬流彦先生に頼んだ書類を変わりに持ってきたんですよ、僕自身学園長に報告が有り

ましたのでついでに持って行ってくれと頼まれました」

学園長は片眉を少し上げると書類を受け取り中身を確認しながらタカミチに仕事の報告をさせた。

「ふむ、してタカミチ君昨日今日と横島君を観てどう思っかね」

少しの間もなくタカミチは横島に感じたことを上げていく。

「彼が侵入者の類なら、僕はお手上げですね。悪意なし、夜は警戒もせずに先に寝て夜に起きた形跡もなし、保育園で職員一人をナンパしたみたいですけどあの年の男性ならありえないことでもないですし、エヴァンにでも頼まないと演技か本気が判断なんてできませんね」

自分の予想道りの答えだったために学園長は手にもっていた書類を引き出しにしまい、ポケット

の中から鍵をひとつ取り出すとタカミチに渡した。

「今後、横島君の家となるマンションの鍵じゃ、明日の朝にはガス、電気、上下水道が使えるようになるので、この後横島君に渡してくれるか、あと悪いが横島君をもう一日泊めてやってはくれんか」

タカミチは鍵を預かり、背広の内ポケットに入れると諦めたように返事を返して学園長室から出ていった。

保育園から帰えりがてら遅い昼飯を取りタカミチと別れた後、散策がてらに桜の木が道沿いに植えている場所を歩いていたら何時の間にかたどり着いた場所。

あたたかい春の日差しに中腹いっぱい横島、そして寝るのにちょうど良いベンチ……そのまま、夢の中へ

「こんなところで寝てるとー、風邪ひきますよー」

誰かが起きるように声をかけてくれたような気がする、眠たい目を擦りながら起きると夕焼け色に染まった景色が広がっていた。

ひらひらと舞う桜の花びらがまるで、小さな光の瞬きに見えた。

ーまた一緒に夕焼けをみてー

「俺は今でもちゃんとお前に、見る目があつたってこと証明できてるかな」

そう言いながら、空を見上げると横島の呟きに答えるように突風が吹き花びらが空へと舞い上がっていく

そこで不思議なことに気づく、春先の夕方になれば寒い筈なのに妙に膝と太腿が暖かく、さらには近くから視線をビシビシと感じる。

空を見上げていた顔を自分の膝に落とすと一匹の猫が横島をジート見ていた、しばらくするとなあくこと鳴いた後横島の膝の上からそのままベンチ端の方に、のそのそと歩いていく。

横島が目で追っていくと、端の方に一人座る女の子がいた、視線の正体は彼女らしくいまだに横島を観察するように見つめている。

横島は彼女が声をかけてくれたのだろうと思い、お礼を言った

「お嬢ちゃん声かけてくれてありがとな、おかげで風邪をひかないですんだよ」

すると彼女は、目線を横島から少し外しもう一度戻すと首を横に振って否定し、猫を片手で抱きかかえ空いた方の手を振りながら去っていった。

リンゴーン、リンゴーン、ゴーン、ゴーン

独特な鐘のなる建物の近くで横島はベンチに座り夕暮れの中で下をむいてブツブツと毒を吐いていた。

「所詮、男は顔なんか？話しかけて避けられないのはイケメンに限るんか？」

そんな横島を見つけたタカミチは大きな溜息をつく。横島の首根っこを掴んで引き擦ってそのまま自宅に帰っていくのであった。

レポート3 アナタハカミヨージンジマスカ？（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。

なにげに、前書と後書が難しく何を書こうか悩んでる作者です

今回は予想より大幅に早く投稿できました。

次回も、早く投稿できるといいなーと思いつつ、プロットの修正をしている今日この頃、日数計算の辻褄を合わせないと困るので、四苦八苦してますので、次回に関しては気長にお待ち頂けると嬉しいです。

ではまた次話、第4話でお会いできたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769z/>

GSとネギま、歯車がネジレて廻りだす

2012年1月12日08時53分発行